

## 小説同人誌評 40

### 家族の暗闇

#### 細見和之

この小説同人誌評も節目と呼ぶべき第四〇回となる。私の記憶に間違いがなければ、これを私が引き継いだのは二〇一三年のことだった。一一年目であり、はじめたとき五一歳だった私はいま六二歳。職場の定年退職を三年後に控える身となっている。小説の執筆者も同じように年をとり、その間に亡くなってしまうかたもある。世界的にはナシヨナリズムと保守化がどんどん進展していった。後半にはコロナ禍があり、ロシアのウクライナ侵攻、ガザ地区へのイスラエルの報復攻撃によって、その傾向はいっそう強まった。

さて今回私の手元に届いている雑誌は三〇冊あまりだったが、そのなかで、家族の暗闇に光を当てた力作が多く見られた。コロナ禍という背景も大事な要素になっている。

『あるかいど』第75号掲載の、渡辺庸子「昏がりの果て」は、主人公・延枝と義母の葛藤を描いて四百字詰め換算一三〇枚を超える

(以下、「四百字詰め換算」は省略)。

延枝は入院している八二歳の義母に昼食を届けるのが日課になっているが、あるときその義母から「一千万円を嫁の延枝に相続させる」という遺言書を見せられる。夫の圭介と結婚した当初から義母との折り合いは悪く、圭介との関係も冷めている。延枝は圭介の親族はもとより自分の親、友人とも気まずい関係にあって、ほとんど孤立無援の状態である。その延枝を、一千万円の相続という約束がかかるうじて支えてゆく。彼女には、得意な料理の腕を活かして小さなおしゃれな店を持つという夢があるのだ。

しかし、圭介との関係もどんどん悪化してゆき、友人であるはずの智里が圭介とつきあっていらしいことも判明する(元々、圭介と智里は恋愛関係にあった)。さらに、義母が亡くなったあと、「相続」の話はいつこうに出てこない。最後、半ば狂乱状態に陥った延枝が義母の遺品であるワンピースやスーツをつぎつぎと切り裂く場面は壮絶である。

同誌掲載の、泉ふみお「答えは 風の中」も百枚近い作品だがこちらはほのぼのとした学園もの。主人公の「ぼく」が東野高校(通称「がし高」)に着任してからの一年がじつに巧みに描かれている。

「がし高」は地域でも有名な荒れた高校で、女子生徒は髪を派手に染め、耳や鼻にピアス

をしている。生徒の喫煙は常習となっていて、校舎のそこらじゅうに吸殻が散らかっている。そんな高校で、最初は無気力だった「ぼく」は校長・大木大吾朗の姿勢に触発されて、高校の改善に力を尽くすことになる。

その校長のほかにも、年長の女性教員で英語担当の中野、音楽担当の松崎など、キャラクターのくつきりとした魅力的な人物がいく人も登場する。全体にエンターテイメントに徹していて感心させられた。

『たまゆら』第126号掲載の、金川紗和子「土曜日で終わり」も、夫婦のあいだの関係の微妙な揺らぎを五〇枚の短篇で描いている。

主人公の亜沙子は夫の光彦とともに小学校の教員をしている。朝、息子の達樹を交互に保育園に連れてゆくことにしているが、達樹が熱を出しているときには、亜沙子の実家の母のもとに預けることにしている。しかし、母親の実家をまわっているときと職場に遅刻することになる。しかも、亜沙子と母は折り合いが悪く、亜沙子はできるなら母親と顔を合わせたくないと思っている。

ある朝、光彦が保育園係りの日、達樹が熱を出している。一ヶ月前に熱を出したときも光彦の順番だった。不満げな光彦に達樹を無理矢理押し付ける形で亜沙子は職場に向かった……

いわゆるモンペ(モンスターペアレント)

に悩まされる小学校風景も組み込まれていて身につまされるが、一貫して光彦が冷静で、亜沙子と光彦のあいだで対話が保たれていることが確かな救いとなっている。

同誌掲載の、佐々木国広「銀の夜」は、一九五〇年前後の瀬戸内海の農村を背景に、小学校五年の守の視点で、ロマネスクな物語を描いている。

父は戦死し、母と姉は空襲で焼死し、守は戦争孤児となった。彼は母の親元・小堂家に引き取られる。小堂家には、謙太郎と利子がいて、守のじつの兄、妹のように接してくれている。その村には小堂家とならんで柳田家があって、こちらはかつての城主の末裔で小堂家とは格式が違々と位置づけられている。柳田家には謙太郎と同じ年ぐらいのひとり娘の志織がいて、守は志織に亡くなった姉の姿を重ね、ほのかな憧れを抱いている。

螢の火の浮かぶある夜、謙太郎と志織が親しく話し、柳田家の所有の、小屋のある蜜柑山のほうに消えがゆくのを守は目にする。二人のことは村のなかでも噂になり、やがて二人の関係は引き裂かれてゆく。とうとう謙太郎はあの蜜柑山の小屋に火を放つ…。

七〇枚に満たない物語なのに、ここにはそれを遙かに超えるゆたかな時間が流れている。「黄色い潜水艦」第76号にも力作が並んでいる。

同誌掲載の、木下衣代「エウレカ」は、「エウレカ」と呼ばれる不思議な老人施設のようなものを背景に、そこに入居していたり、たまに滞在にやってきたりする老人の視点で心理模様を描いた、百枚弱の作品。

「エウレカ」はある種理想的な老人施設に思える。医師も看護師もマツサージ師も、すべて老人に優しく親切で食事もおいしい。しかし、老人たちの名はすべて片仮名で「ナオ」「サンカ」「ヨギ」とまるでホリーネームのよう。かといつて、なにかいかがわしい宗教団体が経営しているというわけでもないようだ。外の世界のしがらみは一切捨てて、ここではリラククスして解放し合いましょ、という雰囲気だ。不意に老婆のひとり、自分が若いころに捨てた子どもの話を痛切に語りはじめたりする…。

「エウレカ」という場自体が、認知症がある程度進んでいる老婆たちの幻想の産物とも読めるが、ここでもやはり裏返し形で家族のことが問われていることは確かだと思われる。

同誌掲載の、本千加子「薔薇の棘」は、三〇枚に満たない短篇だが、出産か中絶かという女性にとつて切実な葛藤を描いている。

花水木が花ざかりのころ、したがって五月の初旬ごろ、郁子のもとに孫の亜矢が久しぶりにやって来る。亜矢はその四月に大学に入

ったばかりである。郁子からすると女性がいちばん美しくして楽しい年頃のはずである。しかし、憔悴した顔つきの亜矢は思わぬことに妊娠していて、中絶のためのお金を貸してほしいと言う。相手の男とは高校時代からセックスはせずに付き合っていたが、大学へ合格したので気を許してしまったのだ。相手に妊娠のことは伝えておらず、自分の一存で中絶するというのが亜矢の強い意志だ。そこから出産と中絶をめぐる、祖母と孫の真剣なやり取りが続く。

亜矢の姿を見ていて郁子は長い間忘れていた「暗い長いトンネルのような廊下」の記憶を甦らせる。じつは郁子もまた結婚前に中絶した体験を持つ身だった。郁子の場合、相手の哲夫と中絶の一年後、あらためて結婚したのだが…。

この問題は、男の側からすると、妻や娘や母親、あるいは恋人との関係においても、深い闇の一つである。

同誌掲載の、藤本あずさ「聖なるキヌア」は、一六〇枚近くあって、今回読んだなかで長い部類に入る。

「わたし」は一五歳下の弟・雅春のもとを訪れる。父親は亡くなり、母親は施設に入っていて、実家には雅春と犬のペレだけがいる。そのペレが癌に罹り、安楽死させることになったのである。ペレは「わたし」にとつても

愛着の深い犬なのだ。

じつは雅春自身、白血病に罹っていて、コロナ禍のなかで危うい通院の日々である。その雅春はまたどうやらゲイのようなのだが、パートナーらしき相手を紹介しても、自分から姉にカミングアウトはしてくれない。ペレを安楽死させ葬儀を済ませるときにも、かなり年配の「健二さん」が雅春に寄り添っている。

後半になって雅春の視点で書かれた部分も登場するようになる。この部分が成功しているかどうか、評価が分かれるかもしれない。また、タイトルに登場する「キヌア」は作品の終わりで「わたし」が雅春と一緒に料理する南米産の雑穀である。生きる原点のようなものが示唆されているのだと私は受けとめた。「躍進号」と題された『飢餓祭』第51号掲載の、石塚明子「娘の結婚」は、娘の結婚をめぐって揺れる家族の姿を、六〇枚あまりで描いている。

時代は大阪万博の開催された一九七〇年、静江は五三歳で小学校の教員を退職し、娘の桐子が入れ替わるように教職に就いた。息子の雅夫が無事結婚したいま、気がかりなのは桐子の結婚である。仲人がいく人もの釣書をもって訪れるが、桐子は見合いを拒み続ける。どうやら桐子には心に決めた相手がいるようだ。

その相手が関西の私学を大学院まで出て、まだ非常勤暮らしなのが静江は気に入らない。とりわけ、静江の母親、桐子の祖母にあたるリツは相手のことを口汚く罵る。それでも静江の夫・誠二、静江の順に、桐子の気持ちに理解を示すようになってゆく。最後まで頑なりツに對しても、桐子は自分たちなりの結婚と結婚式を貫こうとする。

作者はこのところ、教員一族の歴史を代ごとに描いてきた。それは女性が自律を獲得してゆく困難な一歩一歩でもあった。今回の作品は作者自身の世代を母親の視点で描いたということになる。すでにかんりの分量になるそれらの作品群は、どういう全体像を形づくっているのだろうか。

同誌掲載の、渡利真「待ち合わせは「河内長沢駅」です」は、八〇歳を迎える中野美耶子の視点で、同世代の現在を捉えた六五枚あまりの作品。

美耶子は電車で「河内長沢駅」まで出かける。その近くのホテルで宿泊付きの「ほろ酔い会」にでるためだ。それは、四〇年も前、団地で出していた『鳩の森新聞』の仲間の集みである。ホテルに着いてすぐ、ビールを飲みながらのやり取りがはじまる。家族でないだけにかえってしがらみのない言いたい放題のような関係である。ただし、『鳩の森新聞』のバックナンバーを持参してきている律儀な

和田と美耶子は、微妙な過去を持っている。和田が妻を亡くし、美耶子の夫が女性と出奔してひとりになったとき、和田は美耶子にプロポーズするそぶりも見せていたのだ。

食事のあと、男性用の宿泊部屋でスマホを使ったカラオケ大会となり、和田は大いに歌う。その翌朝、和田は風呂場で倒れ、救急車で病院に運ばれるものの、そのまま亡くなってしまふ……。

美耶子は和田の通夜のための待ち合わせ駅「和泉中川駅」を「河内長沢駅」と間違える。和田の死は美耶子にとって悲劇的な出来事なのだが、認知症がはじまりかけている美耶子にとっては、自分も和田も生と死の境に置かれているようなぼんやりとした感覚があるのだ。まるで、生きていることと死んでいることの違いは「河内長沢駅」と「和泉中川駅」の違いに過ぎない、というような。

同誌掲載の、夏当紀子「古墳公園の入り口」は、六五歳ぐらいの里名子（りなこ）が八七歳の母親の介護に追われている姿を描いた五〇枚ぐらいの作品。とくに、小便・大便の失禁がひどい上、里名子を産む前に二度流産した母親はいまは「子宮脱」という病気を患っていることが判明する。

その母親の介護の記述のあいだに、里名子自身の過去が綴られてゆく。結婚し、子どもができないまま早々と離婚し、長いあいだ独

身で仕事を続けて来たのだった。その里名子の過去に対して母親は大いに不満で、介護されていく合間にも、里名子への批判をあけずけに口にする。まさしく孤立無援の里名子だが、作中にはそういう里名子の生涯を暖かく見守っているような、太字での記述部分が時々おり差し挟まれる。

この太字部分について、作品の終わりでは、自分が生まれる前に流産した兄の視点で、里名子自身がその都度書いてきた日記の一節と明かされている（流産したその赤ちゃんは男の子だったと里名子は思っている）。同時に私はそこに、ヴィム・ヴェンダース監督の映画『ベルリン・天使の詩』の、あの天使のようなまなざしを感じた。

『港の灯』第16号でも優れた作品を読むことができた。

同誌掲載の、黒見恵美子「敦史がいた運動会」は、六〇年前の中学校での同級生・敦史（あつし）との出会いと交流を、秀夫の視点で描いた二七枚ぐらいの作品。

秀夫が中学三年に進級したとき、敦史という転校生がやって来る。敦史には軽度な知的障害があって、周囲とうまく合わせることができない。登校中に蟻の姿に見とれたり、授業中も教室をうろろしたりするのだ。そこで秀夫がその見守り役をすることになる。

最初は面倒な気持ちだった秀夫だが、敦史

が口にする言葉はときおり秀夫をはっとさせる。敦史に勉強を教えていたことで、秀夫の試験の成績はすべて百点になる。秋の運動会では敦史はすでにクラスにすっかり溶け込んでいた…。

いささかで過ぎた話かもしれない。しかし、作者の軽快な筆致に私は大いに感心したのだった。

同誌掲載の、白川清彦「蟻地獄のとみさん」も、四六枚あまりの、じつに軽快な物語。

「私」は混み合った病院の待合室で、野沢富子の声をいつものように耳にする。八〇歳あまりの入院患者だが、待合室に現われては誰彼なしにじつこく話しかけ、大いに迷惑をかけるのだ。「私」は秘かに彼女のことを「蟻地獄のとみさん」と呼んでいる。

あるとき、待合室の隣に座っていた男から、あれは大阪北新地のクラブで働いていた「初音さん」だと聞かされる。そこから、その男の回想がはじまる。クラブの常連客でたちの悪い府会議員をやり込めるなど、その「初音さん」の姿がじつに生きいきとしている。

同誌掲載の、かめいのり子「謳え！ 晩秋のキリギリスたち」は、幼いころからの友人、柚木美由紀、城戸信一、森秀樹、それに一ノ瀬香織の、複雑に絡まり合った人生を、六八歳になった美由紀の視点で七〇枚あまりの作品として描いている。

足に軽度の障害をもつ美由紀を小学校から高校まで秀樹は優しく見守ってくれていた。その秀樹に恋を打ち明けられなかった美由紀しかも、秀樹が香織と付き合うようになったことから、秀樹のことを「偽善者」と罵ってしまった美由紀だった。一方、直情型で、じつは秀樹にもまして美由紀を守ってくれたことのある信一は、いまや肺癌末期で、不器用な人生の最後を迎えようとしている…。

タイトルにあるように人生の「晩秋」をどう生きるかがテーマである。お互いの行き違いを振り返って「人間は未熟な生きものだ」と胸のうちで呟く美由紀の言葉が心に沁みる。『文宴』第140号掲載の、藤原伸久「暖かな闇」は、ハマグリの密漁をなりわいとしている二六歳の安井の視点で、濃密な闇をしかししめる二六歳の安井の視点として描いた二二〇枚近くの作品（ただし、この作者のいつもの書き方で、「私」も「僕」も登場しないが、基本的に一人称小説）。

安井は勤めていた居酒屋で密漁ものを仕入れている店主と喧嘩して飛び出し、車上生活をしていく。鳥羽の海産物を扱う店でアルバイトをしているとき、その店で事務をしている中岡アヤと出会う。アヤは店では地味な服装で「オバハン」と呼ばれているが、安井の二つ年上で、シャープな頭脳と不思議な魅力を安井の前では発散する。アヤは安井に密漁

の仕事であらためて安井に持ちかける。安井が密漁してそれをアヤが売りさばくというわけだ。裏切らないための「チギリ」と称してアヤが誘い、安井は自分の自動車内でアヤと肉関係を持つにいたる。

その後、安井がひとり密漁をしている最中に別の密漁団と出くわしたことから、高校を中退した一八歳の光山が安井の弟子のような立場をとることになる。しかし、その光山が密漁に欠かせない鋤簾（じょれん）という道具を落としたことから安井らの密漁が地元漁民に発覚し、現場には監視カメラが設置されることになる……。

作品の最後でその監視カメラを安井は破壊する。これで結末かと思つたら、末尾に「(第二部へ続く)」とある。夜の海をおびただしハマグリが光を放ちながらゆっくりと移動してゆく場面など、ほんとうにすばらしいと思う。こんな場面とさらに出会えるのだろうか。『せる』第124号掲載の、谷山結子「休暇」は、長いあいだこじれていたと思える兄と妹の関係がゆるやかに回復してゆく、四五枚くらいの短篇。

冒頭、三三歳で、転職したばかりの亜沙子(あさこ)のみに父方の祖母が亡くなったという連絡が入る。母はさらに「孫一同」で供花するよう亜沙子に持ちかける。転職してすぐ休暇を取ること、三五歳で無職のうえ引

きこもっている兄が自分で供花代を出すはずがないことなど、亜沙子には不満が尽きない。彼女には結婚している弟もいて、その弟には半年前に二人目の子どもが生まれたばかりだ。祖母の出棺を待つあいだに久しぶりに亜沙子は兄、弟とともにファミレスを訪れる。そこで兄がトイレで席を外したあいだに、弟から思わぬことに「兄貴を避けているのは姉ちゃんの方ほうだろ」と言われる。そこから、兄に対する亜沙子の見方が変わってゆく……。

これも家族の闇を描いた作品だが、はつきりと光が射す形で結ばれている。『AMAZON』第522号掲載の、古鷹羽さち「あじさる幻想」は、「紫陽花」にまつわる三五枚程度の優れた短篇。

理子(りこ)は知り合いに紹介されたTという男性とのランチで「花は何が好きですか」と聞かれて、思わず「紫陽花」と答える。つぎに会った際、カフェのテーブルには紫陽花が飾られていて、帰りにTは紫陽花の花束を理子に渡す。つぎにTと会ったとき、Tはふたたび紫陽花を理子に手渡そうとする。前には受け取ってもらえなかったから色違いを用意した……。

このあたりから物語はアンチ・ロマンのように輪郭が読み取りにくくなるのだが、最後はアンチ・ロマンというよりは見事な手品のような結びになっている。今回読んだなかで

もつとも完成度の高い短篇だった。

『バベル』第6号掲載の、真銅孝「家族アネクドット」は、六五枚あまりで綴られた、いま紹介した「あじさる幻想」をいっそう押し進めたような、他の雑誌では見られないアンチ・ロマンの典型。

なにが記述されているか、ストーリーを紹介することはできない。大学ノートに記された、読み取ることでできない殺人予告を、誰かが誰かに送る。誰かが誰かの車のリアガラスを割る。誰かが誰かを車で撥ね飛ばす。少年が助けを呼びながら死んでゆく。そこには「宅見ジェシカ」なる人物が絡んでいる。

「私」が探偵事務所を訪れる。じつは「私」がすべては「彼」の妄想なのかもしれない……。

「私」はバスのなかでダンテの『神曲』を読みながら、こう考える。「物語のなかで身動きのできない人物たちの不運が、なかば我がことのように思われる」。

タイトルからしてこの作品も「家族のもの」には違いないのだが、家族の心の闇を描くというのとは次元が異なる。その都度の物語の枠組みから人物をどう解き放つか、ということだ。ちょうどシェーンベルクが無調から十二音階へと進むことで音を調性から解き放つたように。それはまた、小説が詩にふたたび限りなく近づくことでもあるだろう。